道　　徳

1　道徳教育における豊かな感性の育成

(1)　道徳教育で求めるもの

道徳教育では，自らの役割と責任を自覚し，よりよく生きる生きる人間の育成をねらいとしている。学習指導要領[1]では，社会の変化に主体的に対応出来る心豊かな児童の育成を図ることが基本的なねらいとされているように，道徳教育の役割はより重要になっていると考えられる。

これからの学校教育が基本として目指し，道徳教育において重視される「豊かな心をもち，たくましく生きる人間の育成」を実現するために，具体的にはどのような心や態度の育成に力を入れる必要があるのであろうか。

『道徳教育指導上の諸問題』[2]によると，豊かな心を育むために育成したい心として，「真理を求める心，自然を愛し美しいものや崇高なものに感動する心，生命を尊重する心，他人を思いやる心，感謝の心，公共のために役立とうとする心など」があげられている。

また，たくましく生きる人間を目指して，「すこやかな精神と身体，基本的な生活習慣，自らの意思で社会規範を守る態度，自律・自制の心，強靱な意志と実践力，自ら生きる目標を求めその実現に努める態度など」の育成が求められている。

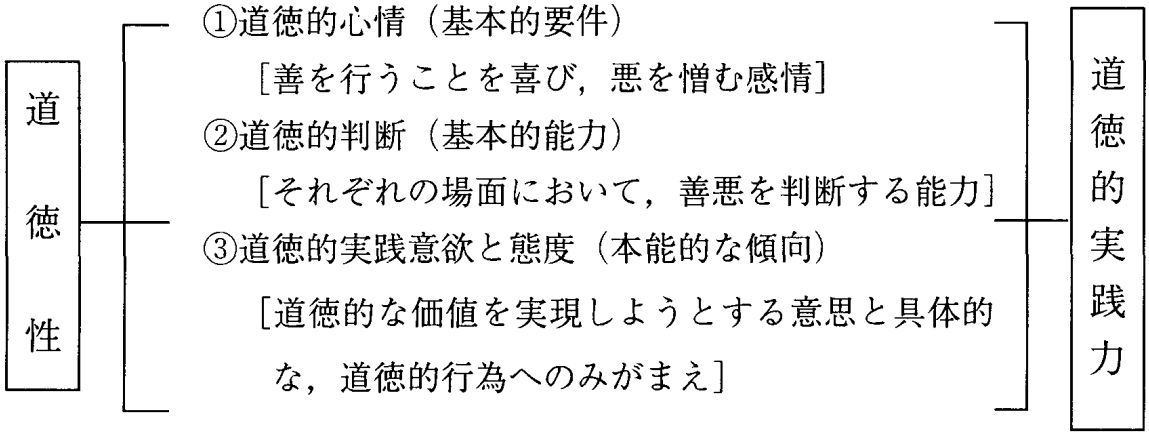
このことから，道徳教育においては，生きることの大切さを感じ，希望をもって主体的に生きていく児童の育成をより重視していく必要があると思われる。

(2)　道徳教育における「豊かな感性を育む」とは

『小学校指導書道徳編』を参考にすると，道徳性は，次のようにとらえることができる。

<道　徳　性>

人間らしいよさ：人間としての本来的なあり方やよりよい生き方をめざしてなされる道徳的行為を可能にする人格的特性



研究テーマに迫るものとして，「道徳的心情」に着目していく。道徳的心情については，次のような指摘がなされている。[3)]

道徳的価値を身につけるのは，一般的には，知的理解からなされるよりももっと直感的であり感性によることが多いと思われる。当然，知ることに伴って生起する感情の側面のあることも否定できないが，特に道徳的価値に対しては，理屈や論理で理解した後に感情的な側面がついてくるというよりも，むしろ直感的な感覚，直感的な認識に基づくことの方が多い。

この指摘のように，道徳の時間を「分かる知性」とともに「感じる感性」（その子なりに感じたり思ったり想像したりすること）を育てる場として構成していく必要がある。

2　豊かな感性を育む道徳教育

(1)　豊かな感性を育む道徳教育の条件

豊かな感性を育む道徳教育にあたっては，まず，「豊かな感性を育む」という視点において，道徳の全体計画を見直し，改善を図る必要がある。豊かな感性を育む道徳教育の条件として次の点を考えている。

① 学校での体験活動を道徳性の育成の視点からとらえなおす。

② 各教科等において育成される児童一人一人のよさを把握して，道徳との関連を図る。

③ 児童の日常生活の場，全てにおいて感性を育む道徳教育を考える。

④ 道徳の時間を中心として，総合単元的な学習づくりを構想する。

⑤ 豊かな感性を育む道徳的な環境づくりを進める。

(2)　豊かな感性を育む道徳の授業の条件

児童は，各教科・特別活動等の学習において，豊かな体験をし，道徳性を身につけている。しかし，それらは必ずしも調和のとれた道徳性の育成とは

いえない場合もある。道徳の時間において，道徳的価値の全般にわたって，基本的な内面性の自覚を図る必要がある。

豊かな感性を育む道徳の授業づくりの条件として次の点から具体化に務めている。

① 道徳の授業に向けての雰囲気づくりが行われていること。

豊かな感性を育成する上では，まず道徳の時間そのものに対する児童の興味・関心を高めておくことが必要であると思われる。児童が心を開いて学習できるように，支持的風土も含めて，学習に入る前の雰囲気づくりを大切にしたい。

② 児童がすでにもっている見方・感じ方を意識化させながら，学習に入ることができること。

授業の導入では，多くの場合，本時に学習する道徳的価値そのものや資料に対する興味の喚起が行われる。この段階で，児童が自分の体験を自分自身の中で十分に想起する時間を保障し，授業が展開されるならば，児童の思いがより豊かになると思われる。その意味で，授業の導入のあり方を検討していきたい。

③ 資料の中の場面に児童が自分の思いや豊かな想像をもって入り込み，感じたことを自由に表現できる場が保障されていること。

道徳の時間では，資料による間接的な体験の中で，児童が新たな感じ方や今までとは違って見方・考え方をする自分に気付くことが期待される。そのためには，資料における場面に十分に自分自身の感じ方や想像をふくらませて，入り込むことが必要である。①の支持的風土ともかかわるが，動作化や役割演技などを通して，資料の状況や登場人物の感情に共感する場と時間を十分とることは豊かな感性を育成する上で大切にしたい。

④ 授業の中で追求してきた道徳的価値について，授業後も児童の心が豊かにふくらむような終末であること。

道徳の時間のみで豊かな感性を育成するのではなく，この時間の発展としての道徳学習の中で，さらに発展させていくことを見通した終末を考えていく。

(3) 授業づくりの具体的な工夫点

豊かな気づきや感じ方を育む取り組みの中で，具体的に次のような工夫を

おこなってきた。

○　学習の前提なる風土づくりでは，ねらいとする道徳的価値にかかわる場面を日常生活の中で意図的に設定する。

○　授業の導入部では，これまで，本校道徳で多く位置づけてきた「経験の想起」による導入ではなく，展開部でおこなう活動や道徳的価値にかかわる伏線としての活動のあり方を工夫してきた。例えば，「役割演技などを通して意識化させる活動」や「動作化」，また「ゲーム」や「エクササイズ」などである。口頭発表に片寄りがちな「経験の想起」に比べ，子ども一人一人の心身のリラックス（開放），展開部で扱う主人公の道徳的心情や行為への共感をより一層うながすことができると考えている。

○　展開部では，視聴覚に訴える資料提示の工夫や導入部の活動を生かした問いかけを工夫してきた。例えば，役割演技などを通して道徳的価値の追求を深めることや，ＢＧＭとペープサートの併用による資料の読み聞かせなどである。

3　今後の課題

導入や展開部での活動のあり方に重点をおいた取り組みをしてきた。そのなかで，具体的な活動を位置づけた導入は効果的であるが，さらに，資料内容や読みとりに即した活動を選び，学級の実態に応じ設定していく必要がある。資料でねらう価値内容の伏線となる最適な活動を実践を重ねながら，指導計画に盛り込んでいきたい。なお，このような導入の工夫などは，他資料や領域と関連をはかりながら行っていくことによって，道徳の時間でもより効果的になっていくものと思われる。

参考文献

1）文部省『小学校指導書道徳編』1989年，１～15頁

2）文部省「小学校道徳教育指導上の諸物語」1990年，１～７頁

3）瀬戸真編著『道徳性の育成を目指す授業実践の改革』ぎょうせい1991年，６頁

4）文部省「初等教育資料」1993年№596，50～59頁，60～67頁